The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Policy Design with Imperfect Common Knowledge
Author(s)	盛本, 圭一
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58276
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【7】

氏　　名	盛　本　圭　一（もり　もと　けい　いち）
博士の専攻分野の名称	博　士（経済学）
学　位　記　番　号	第　２４３０９　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 経済学研究科経済学専攻
学　位　論　文　名	Policy Design with Imperfect Common Knowledge （共有知識の不完全性と政策デザイン）
論文審査委員	（主査） 教　授　二神　孝一 （副査） 教　授　池田　新介　　教　授　石黒　真吾

論文内容の要旨

本論文は、共有知識の不完全性というテーマに沿って、第一部（第一章および第二章）において最適金融政策の誘導問題、第二部（第三章）において委員会の設計問題を分析している。

第一章は、中央銀行の情報公開と最適な金融政策の関係を論じている。具体的には、中央銀行は、民間の経済主体に対して自らが持つ情報を公開するかどうかを内生的に選択するというモデル設定をしている。中央銀行の情報公開の有無が社会厚生に与える効果については既存研究が存在しているが、本章では、情報公開の実施そのものを中央銀行が内生的に選択すると仮定している点で、従来の研究にはない新しい視点を導入している。また、最適な情報公開政策の誘導メカニズムとして、インフレ目標に対する説明責任を利用した議論をすることにより、現実に採用されているインフレ目標政策の制度との関連を明らかにしている。

第二章では、金融政策委員会の意思決定から出発する金融政策分析のモデルを構築し、委員の選好と委員会の最適な人員構成との関係について論じている。最初に、最も基本的な新ケインズ派モデルをマクロ・モデルとして採用し、金融政策委員会が名目利子率の決定を投票によって行う過程を描くミクロ・モデルを構築・分析して、金融政策委員会の意思決定がマクロ経済にもたらす影響を捉える枠組みが提示される。次に、各国の金融政策委員会で観察される委員の選好の異質性を考慮し、委員会の中でどんな選好をもつ人材がどの程度を占めることが望ましいかに関して議論しており、その結果は観察される事実と整合的である。この分析は、金融政策デザインの分野に新しい論点と手法を与えるものである。

第三章は、政府・中央銀行・企業などの組織が意思決定を委員会に委ねる場合、その最適な人数はどのようにして決まるかを美人投票ゲームの枠組みによって情報の不完全性と委員間の協調行動の観点から分析している。本章のモデルは協調行動の存在により委員会の人数を増やすことが投票における情報利用の効率性を下げることを示している。このことから、委員会内の協調行動が生じうる場合では、人数を増やすことによる非効率な協調の損失拡大を避けるため、比較的少人数の委員会を形成して意思決定を行うべきであるということである。

論文審査の結果の要旨

本論文は中央銀行が金融政策を実行する場合に，その保有する情報をどのように公開すべきかについての興味深く斬新な研究となっている。また金融政策を決定する委員会の構成をどのようにするべきかについて新しい結果を導出している。つまりこれまでの研究ではインフレ重視の委員ないし総裁から委員会は構成されるべきとの結果を得てきたが，情報の精度との関係でGDPギャップも重視する委員も構成員になるべきであるとの結果を得た。また委員会の構成メンバーの最適数についても新しい結果を得ている。以上から、博士（経済学）に十分に値すると判断する。